

先週の礼拝メッセージ(2022年11月20日) ベン牧師

「試練の中の最善」 マルコによる福音書 5:21-24、35-43

今日登場するヤイロは、会堂の管理をする仕事をしていました。当然のことながら、会堂で教えるラビや律法学者、パリサイ人たちは、いつも一緒に仕事をしていただいでしょう。その彼がイエス様のもとに行ったというのは、相当な覚悟と勇気のいることでした。なぜなら、この頃はすでに、ユダヤ教の指導者たちはイエス様のことを嫌い、亡き者にしたいとさえ思っていたのです。そのイエス様に娘の癒しを願うに行くのですから。

ヤイロの住む町には、イエス様は度々訪れておられましたから、彼の娘が急病でない限り、死にそうになる前にいくらかでもイエス様のもとに行く機会はあったはずですが、しかし彼は、ユダヤ教のリーダーたちが嫌っているイエス様のもとに、お願いに行くということがどういうことか、つまり、自分の職も住まいも失うということだとわかっていました。ですが、いよいよ娘が死にそうになって、何とか助けてほしいという一心で、イエス様のもとに行き、ひれ伏してお願いしたのです。

ところがイエス様はすぐには来てくれませんでした。そうこうしているうちに、ヤイロの家から「お嬢さんは亡くなりました」という知らせが入りました。それを聞いてイエス様は、3人の弟子を連れてヤイロの家に向かいました。そして38節からの奇跡が起こるのです。

今日のタイトルは「試練の中の最善」です。これは一般に言う「不幸中の幸い」とは全く異なります。ヤイロはイエス様に「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」(23節)と願いました。この時点での彼の考える最善でした。ところがイエス様はその通りには動かれませんでした。押し寄せる群衆を止めることもできるのに、また、12年長血を患っている女性を後回しにもできるのに、イエス様はそれらのことに時間を使われました。(24~34節)

そんなことをしなければ、ヤイロの娘が死ぬ前に着いて癒すことができたはずですが、イエス様は、その娘が息を引き取るのを待っておられたのではないのでしょうか。

娘の死の知らせは、ヤイロにとって最悪の展開です。イエス様のもとに行って平伏した段階で、彼は仕事も家も失い、さらに愛する娘も失いました。希望が全く消え失せたのです。でも、彼の考えていた最善は、実は最善ではなかったのです。というのも、もし娘の存命中にイエス様の癒しがなされたとしたら、聖書の他の箇所でもそうであるように、宗教の指導者たちはイエス様による癒しをガンとして認めようとはしないでしょう。ですから、ヤイロの立場はますます悪くなり、彼もそういう圧力によってイエス様への信仰も揺らいだかもしれません。人間ですから、娘が元気になって何年か経つと、感謝も薄らいできたでしょう。彼の心は、喜びや確信よりも、疑いで満ちてきたかもしれません。しかし、死んだ

娘が生き返ったとなれば、誰が否定しようにも、イエス様のわざであることは、たとえ律法学者、パリサイ人であっても認めざるを得ません。ヤイロも、イエス様が娘を生き返らせ癒してくださった事実は、深く心に刻まれたでしょう。それらは彼のこれからの人生のさまざまな問題を乗り越える力になるはずですが、

当のヤイロは、この時点ではこれからの展開を知りません。打ちひしがれるヤイロに、イエス様から声をかけられました。

「恐れることはない。ただ信じなさい。」(36節)

私達も人生の歩みの中で、さまざまな願いを持ちます。特に試練の中に置かれた時、私の願う方法と時で解決されるのが最善だと思ひ祈り求めます。しかし、大抵の場合はその通りには行きません。私達の考える最善は、往々にしてそうではないことの方が多いのです。私達には明日は見えないからです。しかし神様は私たちの明日を見ておられ、歴史も動かして、世の中の将来も全てをご存じなのです。

ここでヤイロの願いを聞いたイエス様は、あえてゆっくりと進まれました。彼の娘が息を引き取るのを待っておられたのです。なぜなら、それが最善だからです。ヤイロにとっての最悪が、最善となるのです。娘が生き返って初めて、ヤイロはそのことを知るのです。

皆さんも経験があるのではないのでしょうか。その時は大変だったけれど、後になって振り返ると、その大変さが最善だったという経験です。

イエス様ご自身もこうおっしゃっています。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」(ヨハネ13:7)

私たちが、こうなればいいと願うことは悪いことではありません。しかし、その解決方法や時を自分で勝手に決めてしまっっては、そうならない現実に信仰が揺らぐこととなります。神様の時と方法は私たちの思いと違うことが多いからです。私たちが最悪と思うことこそ、神様の最善であるということは多くあります。だから私たちは、自分の願いを求めながらも、同時に神様の方法と時があるのだということも心に留める必要があります。

「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私達は知っています。」(ローマ8:28)

全てのことをご存知の神様が、用意して下さることこそが本当の最善なのです。

イエス様の十字架がそうでしょう。弟子たちにとってイエス様が捕らえられ殺されるなんて、最悪のシナリオです。しかし、神様のご計画は十字架によって全ての人の罪が赦されるという勝利の出来事だったのです。神様は生きて働いておられるお方です。神様こそがあなたにとっての最善をご存知です。だからこそ、私達は「あなたの御心の通りになりますように」と、へりくだって神様の前に出ていきましょう。試練の時こそ、神の最善を知るチャンスなのです。